

# バングラデイシユ仏教

三 宮 積 穂

## イスラム教の世界

インド半島の北東部、ベンガル湾に面した位置にバングラデイシユ人民共和国がある。人口一億六一万人、総面積一四万平方キロメートル、国の主な産業としては米、ジユート、茶などを生産する第一次産業があげられる。

つい二〇年前までは、東パキスタンと呼ばれ、一九七一年現在のパキスタンから分離、独立しバングラデイシユ人民共和国ができた。

ダッカ国際空港に降り、そこからホテルに向う途中タクシーの中から初めて見るこの國の様

子には独自の雰囲気が漂っていた。街行く人達の姿は殆んどインド人と変わるものはないが、印度の騒々しさは感じられずどちらかと言えば、ひつそりと静まり返っているという感じだ。

道路の両側には、飲食店、茶屋、雑貨屋などが立ち並び、それなりの店構えをしているが少し路地の方に入ると小屋とも言えない程小さく汚い店の中に品物が並べて売られていた。又、これらの路地やちょっとした空地には路上生活者といわれる人達が住んでおり、彼らは棒で骨組みを建て、その上から布やビニールをかぶせた雨・露だけを防ぐといった小さな家に住み、

路上で火を燃やして食事を作り食べていた。そこに住む人々は、跣で服装も薄汚れていた。

インドカルカッタにも路上生活者は沢山いたが、彼らの表情を見ている限り、貧しくとも精一杯生きているという感じがした。そして何よりも彼らの顔に笑顔があつたがバングラディッシュの路上生活者には、それが感じられず、眉間に皺を寄せてその貧しさを必死に噛み締めていた。貧しさに必死に耐えているという印象を受けた。

夜街に出てみると、ランプの灯りの中に彼らの顔が映し出された。その顔にも眉間に皺がよっていた。

非常に貧しい国、私のバングラディッシュに対する第一印象である。

バングラディッシュの国の特色の一つとしてあげられるものに、政府がイスラム教的な国家を目指してその運営を行っているという点があ



バングラディッシュ首都ダッカ

る。かといって信仰の自由を否定しているわけでもなく、仏教、キリスト教、ヒンドゥ教などの宗教も存在する。しかし、その割合はやはり圧倒的にイスラム教徒が多く、全人口の九〇%がイスラム教を信仰しているという数字がでている。私が三日間滞在した首都ダッカでは、毎朝六時になると有線放送で街中にコーランが流されていた。又、街の広場などではマイクを片手にイスラムの教えを説いている布教師の姿が目についた。

イスラム教は、キリスト教、ユダヤ教などのようなセム的ー神教の伝統に属する宗教であり、又その教義もやはりキリスト教・ユダヤ教の影響を受けている。

六世紀の始め、アラビアの都市メッカで、マホメットによって説かれたのがその始まりであるコーランの中に「汝らの神は唯一なる神」、「並ぶものなき神」とくり返し強調されているよう

に、この宗教は、唯一アラーの神だけを信仰し決して偶像崇拜を認めない（イスラム教徒に言わせれば）絶対の一神教である。

マホメットを通して語られたアラーの神の言葉だけが真実であり、その神によつて示された法がすべてなのである。

私の受けた印象では、イスラム教の場合他のセム的ー神教に比べてその性質に柔軟性が感じられない。カチカチの鉄の塊のようなイメージが浮かんでくる。

これには、この宗教がアラビアという、言わば砂漠の中で発生したということに関係があるのではないかだろうか。（私の推測であるが）アラビア半島のように砂漠の多い厳しい風土の中では、当然食物もあまり育たずましてや日中は想像を絶するような暑さの中で、そこに住む人々はいつたいどのよだんな生活をしていたのである。

現在のよう文明が発達している時代ではない。

たぶん一日、一日をやつとの思いで過ごしていたことだろう。今日、食べる食物もなく腹を空かして食べ物を求めて歩きまわっている人もいたかもしれない。太陽が沈んで暑さが和らぐまでじっと木陰で堪えている人もいたことだろう。

果たしてこのような厳しい風土の土地に住む人々に例えばキリスト教のような右の頬を打たれたら左の頬をさし出せ的な精神が通用するだろうか。

アラビアには過去に、アブラハム教典に書かれているような「目には目を、歯には歯を」的な思想が存在している。少なくとも、この地にはキリスト的思想の教えは根付かないような気がする。砂漠に住む人々には、もつと強い有無をも言わせない神の教えが必要であつたはずである。そして彼らは、それをマホメットによつ

て説かれた。

唯一絶対の神、全知全能の神「アラー」に求めたのだろう、現に、コーランの中には「御心のままにある者を迷いの道に陥れ、また御心のままにあるものを正しき道に導き給ふ」というように、人間は、この神に依りすぎるより以外に救われる道のないことが説かれている。

アラーの神を信じることによつて生きる希望を与えられ、又、彼ら自身もそれをその神の上に求めたのだろう。いや、求めざるをえなかつたのかもしれない。

私がバンガラディシユで知り合つた一人のイスラム教徒が、「アラーの神が一息『フ』」と息を吹けば、この世界の全ての人々が死んでしまう。だけど、アラーの神を信じその教えを守つてゐる限りアラーは俺達を守つてくれる。そして、未来には一〇〇パーセントの幸福が待つてゐるんだ」といった言葉が今も忘れられない。

現在ではイスラム教徒は、イスラム的教義や

儀礼、イスラム的論議のみならず、イスラム的結婚や離婚、イスラム的相続等々、要するにトータルな形でのイスラム的な生き方や生活様式を行つてゐる。

バングラディシュにおいても、政府がイスラム的国家を目指している点で例外にもれず、それが受け入れられている。

このようなかで、彼らの国では異教徒と呼ばれる仏教、キリスト教、ヒンドゥ教を信仰している人達が、少なからずその影響を受けているのはいうまでもない。

日本山妙法寺、山主・藤井日達上人が生前バンガラディシユに平和祈願の仏舎利塔をつくるため、政府にその申請を申し出たが結局は許可がおりなかつたという。

なぜか？ 答えは簡単である。藤井日達上人が仏教僧であり、仏の教えに基づいて仏舎利塔

を建設しようとした為である。

私がお世話になつたダッカの寺院では、コーランが有線放送で流される時間は、寺内でマイクなどを使つて経を唱えることができず又、イスラム教の寺院が開放的に開かれているのに對してこの寺院は周りを高い塀で囲み外部からの侵入者を厳重にチェックするという感じを受けた。その中で僧侶達はひとつそりと信仰の火を灯していた。

### バングラディシュ仏教の過去

現在、バングラディシユ仏教界は、二派に分かれている。

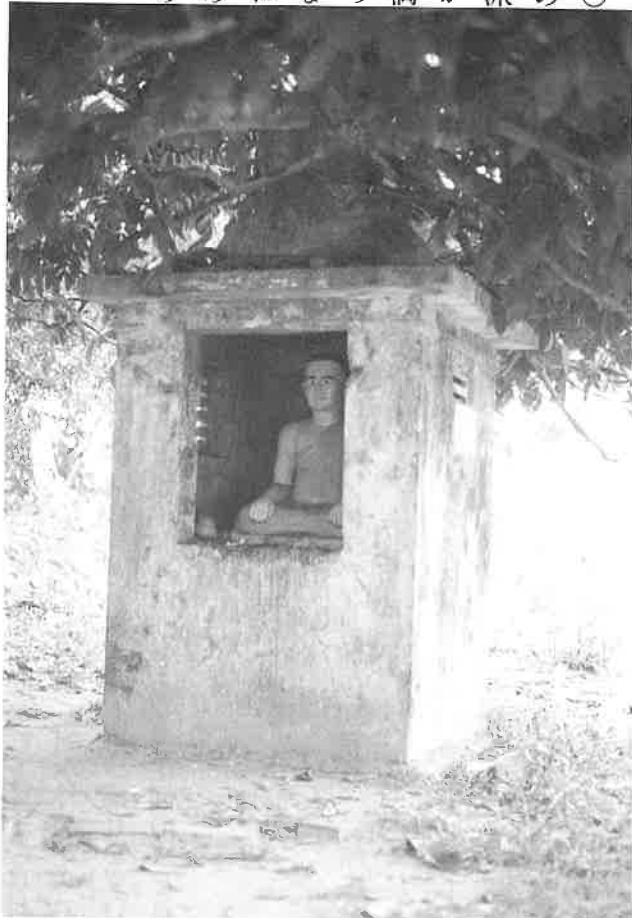
一つはサングラス派といわれ、それに対してもの派をマハテロ派といふ。どちらもタイ、ビルマ、スリランカ等と同じ南方上座部の仏教を実践し僧侶は二二七の戒律を守りながら生活をしている。その数はサングラス派僧侶一〇〇〇人、

寺院数二〇〇カ寺、マハテロ派僧侶五〇〇人、寺院数一〇〇カ寺といわれ、又、信徒の数いわゆる仏教徒の数は二派を合わせて五〇万人というからこの国の人口の一%にも満たない数である。（尚、僧侶の数、寺院数、並びに仏教徒などの数は正確な調査が行われておらず、これらの数字はあくまでも一応の目安としてあげておく。）これらの寺院、佛教徒は、殆どバングラディシュの南東、ビルマとベンガル湾に挟まれたチッタゴン地方に集中している。

この国の佛教界が二派に分かれた直接の原因は、ビルマ僧・サングラス比丘の感化を受けた

僧侶達が、現在のマハテロ派から枝分れをしサングラス派という一派をつくったからであるが、実はそれまでに至る経過が複雑である。

今から約一〇〇年程前に、ビルマ僧サングラ



佛教寺院で見かけた仏像

ス比丘がバングラデイシュの寺院を訪れた。(当時は、国境などというのは名ばかりで、その近くに住む人々はわりと自由に往来ができたのだろう。バングラデイシュの隣りに陸続きでビルマがある)そこで彼が見た僧侶の生活は、彼の国で行われている南方上座部仏教の形態とはおよそ遠くかけ離れたものであつた。

当時のバングラデイシュの僧侶は、葬式等のいわゆる宗教的な儀礼は行つていたが、その生活の様子は信徒の人々と同じような服を着、日に二度の食事をとり、そして妻帯をして暮らしていた。(これらは、南方上座部仏教ではすべて戒律違反となる)つまりは、僧俗の区別がなく、全く信徒の人々と変わらぬ生活を送つていたのである。(この辺の感覚は、日本人にはわかりにくいと思う)ただ、自分達が僧侶だという印として肩から赤いタスキのようなものをかけていたらしい。

戒律を最も重要視する南方上座部の僧侶サングラス比丘が、その戒律を全く無視した生活を送つているバングラデイシュの僧侶達に対して激しい批判を浴びせたのはいうまでもない。彼は、僧侶達に二二七の具足戒を授け、三衣一鉢の生活をすることを勧めた。

我々日本人僧は、戒律に対してもその感覚が麻痺しているように思われるが、タイ、ビルマ、スリランカ等の南方上座部仏教の僧侶にとつては、戒律を守る生活が全てというくらいそれに對しては厳しさを持つている。

わずか一年間ではあつたが、タイ国で僧侶生活を経験させてもらった私には、サングラス比丘の行動は深く領けるところがある。ちなみに南方上座部仏教の僧侶が妻帯をすれば、パーラチク罪、最も重い戒を犯したことになり教団追放である。

この時に、サングラス比丘に従つて具足戒を

受けた僧侶達がサングラス派と名乗り、それに對して具足戒を受けることを拒んだ僧侶達はマハテロ派と名乗るようになつた。現在では、マハテロ派の僧侶達も二二七の具足戒を受け、三衣一鉢の生活を送つてゐる。しかし、それは過去の性格上嚴密なものとはいえないようである。

では、一体何故にバングラデイシユの僧侶達が妻帯をし、信徒の人々と同じ生活を送るようになったのか。ここにまさしく過去のイスラム教徒の仏教弾圧による仏教徒の悲劇が表されてゐるようと思う。

バングラデイシユに初めて仏教が伝わつたのは、五世紀頃、現在のインド・アッサム地方を経てだといわれてゐる。今でこそ、この国の殆どの人々がイスラム教徒であるが、それ以前少なうともイスラム軍がこの地方に進出してくるまでは平和な仏教国であつたのだろう。

それを示すようにバングラデイシユには、わりと広い範囲で各地に仏教遺跡が点在している。中でも、ダッカから北西約一八〇キロメートルの位置にあるラッシャヒ遺跡、ハープール遺跡は大きなもので、仏教大学の跡や一〇〇人の僧侶を収容できる庫裏の跡などが残されている。どちらも八世紀につくられたものである。

八世紀といえば、インドでは既に大乘仏教後期の頃であり、ナーランダ大学でも専ら大乗に関する講義などが行われていたというから、ここでもその影響を受けたことだろう。

そして、一二世紀の終り、アフガニスタンのバクティヤール・ハルジー率いるイスラム軍がインド・ビハール地方を攻略した際に多数の僧侶を殺害し、多くの寺院、仏像を破壊したようだ。その魔の手はバングラデイシユにも延びてきただのである。

現在、ラッシャヒ遺跡、ハープール遺跡等に祠

られていた仏像は、ダッカ国立博物館に保管されているが、それらの仏像は顔を削り取られ至るところを傷つけられていた。

この仏像を見る限り、「片手にコーラン、片手に剣」というイスラム軍のその性質を表す言葉通り、彼らのバングラデイシュ進出はやはり武力によるものであつた。何百人の僧侶、仏教徒達の血が流されたことは想像にかたくない。彼らは、自分達の身の安全を求めて必死に逃げ回つたことだろう。

バングラデイシュの首都ダッカには、現在三つの寺院があるが、これらは最近になつて建てられたものである。割と古い寺院は、チッタゴン地方の山の中にある、それも道なき道を歩いてやつとたどり着くといつたところに存在している。——今回、チッタゴン地方の寺院を三カ寺訪問したが、どの寺院に行く時もそこに着く

までは何回となく「この先に本当にお寺があるのか」という思いが起つた。——

又、これらの寺院には、一見してビルマ形式の釈迦像とわかる仏像が安置されている。

私が八日間にわたつて訪問した七つの寺院には、サングラス派、マハテロ派を問わず、全てビルマ形式の釈迦像が祠られていた。

実は、これが腑におちなかつた。不自然なものである。寺院の外観が古びているのに対しても、その釈迦だけがやけに新しい。又、サングラス派の寺院にビルマ形式の釈迦像が祠られているのなら話はわかるが、当時具足戒を受けることを拒んだマハテロ派の寺院にも同じようにビルマ形式の釈迦像が祠られている。

本来なら、マハテロ派の寺院に関しては昔からの仏像が祠られているのが自然である。これらの仏像が、バングラデイシュの寺院にもたらされたのは、ビルマ僧・サングラス比丘がこの

地に訪れてからであろうから、わずか百年程前である。

では、それ以前寺院に納められていた仏像はどこにいったのか。それとも、最初からこれらの寺院には仏像が安置されていなかつたのだろうか。

寺院の周り、あるいはその近くには、仏教徒だけの村があり、その構成は殆ど血縁関係で成り立っている。村の規模も十人から二十人という所もあれば三千人以上も住む大きな所もある。

壁を泥のようなものでつくり、その上に藁の屋根を乗せているという形式の家が多い。家中は二部屋ぐらいの小さな間取りで部屋の少し高い所に、仏の姿を象った仏画が安置されていた。この家に入った時も少し妙な感じがした。というのも、日本やタイなどの仏教徒の家の中には割派手な仏像などが祠られているがここに



寺院に参拝する仏教徒

はそれがなかつた。話を聞いてみると、この国の佛教徒は仏像を家の中に置くのを好まないという。

話を一番最初に戻そう。

この国では、元はインドから直接入つた佛教が行われていた。それは、現在残されている当時の佛教遺跡を見ても明らかである。当時そこでは、僧侶は戒律等を守り三衣一鉢の生活をしていたはずである。それがなぜ妻帯をし、信徒の人々と同じ生活をするようになつたのか。

これから先は、殆ど私の想像である。

現在バングラディシュには、八世紀につくられた佛教遺跡がインドとの国境近く、ラッシャヒとハプールとに残つてゐるが、これらの遺跡の囲りには佛教徒が住んでおらず、ここから南東へ約五〇〇キロメートル下つたビルマとベンガル湾に挟まれたチッタゴン地方に佛教徒は集中している。

イスラム軍がバングラディシュに進出してきた時点で、主な寺院は破壊され、そして大勢の僧侶、佛教徒の人達が殺されたことだろう。しかし、その難を逃れた人達もきっといたに違いない。

イスラム軍が進出してきたコースは、地理的関係からいつてやはりインドから徐々にその勢力を広めてきたはずである。となると、当然その難を逃れる為に佛教徒達はその場所から遠い所に逃げたことだろう。それが、現在のチッタゴン地方である。それも、人が住んでいるとも覚束ない深い山の中へと逃げたのである。

しかし、いつ何時みつかるかもしれない不安と怯えの為に、自分達が佛教徒である形跡を残すわけにはいかなかつた。その為には、寺院としての建物は建てても中には仏像を祠らず、又、信徒達の家の中にもそういう形跡を残すものは置かないようにしたのではないだろうか。(そ

れが今に至るまで行われている。)

そうなると、ビルマ僧サングラス比丘がこの地方を訪れた時、僧侶が信徒の人々と同じ生活を送っていたのも頷ける。僧侶達も自分達が仏教僧である形跡を消したのである。衣を脱ぎ捨て、戒をして、信徒達の生活に入つていったのではないか。

そして、ただ自分達が僧侶である証しとしてサンカティ（三衣のうちの一つで、南方上座部仏教では僧侶はこれを肩にかける。日本でいう僧伽梨衣）だけは形を変えて身につけた。これが肩からかけていた赤いタスキのようなものである。

以上、これはあくまでも私の推測である。

#### バングラデイシユ仏教の今

バングラデイシユでの南方上座部仏教

バングラデイシユ並びに、タイ、ビルマ、ス

リランカ等の国々では、現在南方上座部仏教が行われている。

南方上座部仏教とは、釈尊没後百年程後に教団規則の解釈などの違いから、保守的な上層の上座部と進歩的な大衆部とに根本分裂し、その後さらにいくつもの枝末分裂をした際にできた上座部系の一部派、分別上座部の教義が紀元前三世紀中頃にインドからスリランカに伝えられ、後に南方の国々、いわゆる前記の諸国にもたらされたものである。

バングラデイシユにおいては、それがわずか百年程前にビルマ僧、サングラス比丘によつて伝えられた。

この仏教は特色として、僧侶達の礼拝の対象は釈迦一仏である点、又、彼らはパリー語で書かれた三蔵を保持し、それらを学びながら二三七の戒律を守り乞食、托鉢の生活を送つている点などであろう。

その戒律とは、食事の作法から歩き方など日

常的規制から、不殺生、不偷盜、不妄語等の道

徳的規制までと幅が広い。

これらの仏教が行われている国では、在家信徒の青年男子は、二十歳を過ぎれば一度は出家しなければならないという風習がある。彼等は、一カ月乃至二カ月といった短い期間を寺院で僧侶として過ごすわけである。

私のお世話になつたタイ国パクナム寺ではパンサーの期間には（本来、僧侶は乞食、托鉢をしながらの遊行生活が基本であるが、雨の降る雨期の期間だけはそれが思うようにできない為、その間は、寺内に住み、パリー三藏、メディーション等の（日本でいう坐禅）修学を行う。この期間は、その年、その国によつて違うが、七月から十月までの約三カ月位である）これらの一時僧と呼ばれる一時的な出家者が多く、私はこの期間を約三百人余りの一時僧達と

一緒に生活を共にした。

その一日は、朝四時から夜八時までの勤行、パリー三藏等の講義、メディテーションと割とハードな日々が続く。彼等は、パンサーの期間が終ると還俗し、また元の生活に戻つていく。

この風習は、仏教徒の数の少ないバングラデイシュにおいてもやはり行われている。

そして、これらの国では出家者と在家信徒との区別が厳しそうにはつきりと分かれしており、例えば自分の子供が出家し僧侶になつたとすれば、そこには親と子という関係は存在せず、あくまでも僧侶と在家信徒という関係になつてしまふ。

パンサーの期間に、自分の子供に食事の供養に来た親が、先ず合掌、三挙し恭しくそれを差し出す姿を何度もみかけた。在家信徒にとつては、僧侶は戒律を保持し仏の教えを学び、実践している尊い存在なのである。

私がタイの東北部に行つた時なども、向こうから歩いてきた若者が私の姿を見るなり地べたに這いつくばつて三拜をしだしたのに驚いたことがある。

南方上座部仏教の国では、僧侶は厳しい戒律を保持し、それを実践し、又その仏教 자체が深く民衆の生活の中に入りこんでいる。

ではバングラデッシュにて僧侶達は具体的には一体どのような生活を送つてているのであろうか。

各国によつてその形態には相違があるが、こ

こでは今回私が訪問した僧侶達というよりは沙弥達（南方上座部仏教では、その戒律の中に未だ二十歳にならぬ者に具足戒を授けてはならないという戒がある。その為、二十歳に達していない者は見習僧として十戒だけを守りながら寺院生活を送る）の教育を行つてゐるバングラデイシュ比丘トレーニング＆メディテーションセ

ンターの一日を紹介しながら、バングラデイシユでの上座部仏教をみてみたいと思う。

十戒：不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不

飲酒、非常食よりの遠離、舞踊観劇よ

りの遠離、莊嚴の原因である塗香・服飾品などの遠離、高臥床・広臥床よりの遠離、金・銀受領よりの遠離

現在このセンターには、一人の僧侶と二十人の沙弥が生活しており、彼等はその一日を決まつたスケジュールに従つて過ごしている。それは次のようなものである。

午前

四時

起床

五時

掃除

六時半

勤行

七時～十時

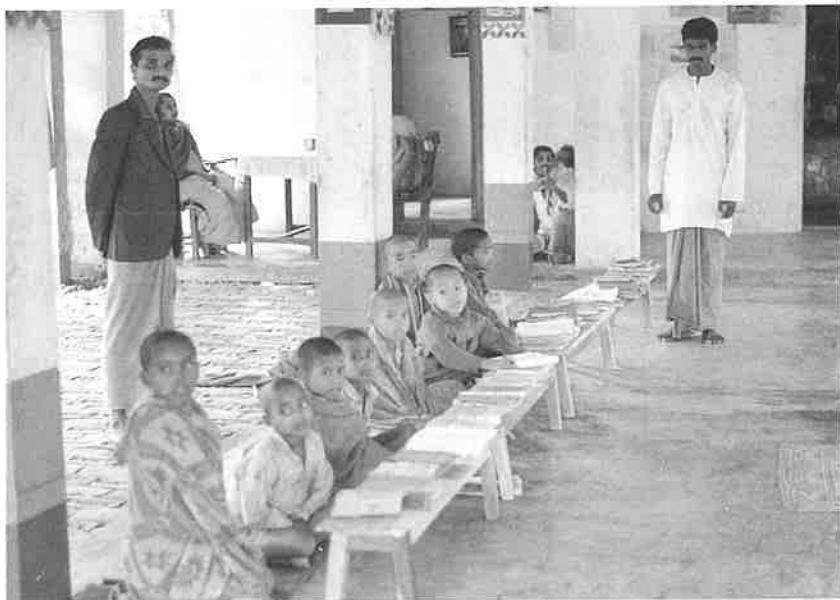
パリー三藏並一般学校教育

の授業



バングラディッシュ比丘トレーニング & メディテーションセンター

勉強中のサマネーン(小僧さん)



十時半 托鉢  
十一時 食事

午後

十二時～一時 自由時間  
一時～四時半 パリ―三蔵並一般学校教育の授業

四時半～七時半 自由時間

七時半～ メディテーション30分

八時半 勤行30分

八時半～十時 パリ―三蔵の授業

十時半 消灯

タイ国では、朝、手の平の甲がうつすらと見え始めた頃、僧侶は一斉に托鉢に出かけるが、ここではそれが十時半から行われている。では、朝の食事はどうしているのかといえば、

在家信徒の人達が自分達の家で作ってきた料理をこのセンターに運び供養している。

バングラデイシユでは、このパターン又は、

在家信徒が寺院に住み僧侶の食事を作っているというパターンが多い。

僧侶達は、あまり托鉢をしないらしい。食事が終った後、僧侶は在家信徒に五戒を授ける。

(不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不飲酒)僧侶達はそれらを守りながら一日の生活を送るのである。尚、僧侶並びに沙弥は戒律によつて午後からは水などの液体以外は一切を口にすることができない。

このセンターでは、一日八時間のパリ―三蔵および一般学校教育が行われており、沙弥達はこの時間に普通の学校教育を受け、そして南方上座部の教義、戒律等の勉強をしている。一般学校教育に関してはここに住む僧侶がそれを教えている。

しかし、その内容は充実したものとはいえないようである。このセンターでは、深く南方上座部の教義等を学びたいという意志のある沙弥

に対する対してはスリランカ、タイといった国へ送り出しそれらを学ばせているからである。

又、バングラデイシユでは年に一度、PAIL SANSKRIT AND EDUCATION BOARD

主催の南方上座部仏教に関する総合的な（パリ一語、教義、戒律）試験があり、僧侶、沙弥は必ずこれを受けることが義務づけられている。その難度によつて、一級から九級までに試験内容が分かれており、一級から二級、三級へと順繰りに上へと上がつていくシステムである。

これには、僧侶、沙弥の区別なく、沙弥でも試験を合格さえすれば、上へ上へと上がつていくことができる。

僧侶の位は、この試験の何級を合格したかとすることと何回のパンサーを過ごしたかによつて決まる。

メディテーションに関しては、比丘トレーニング＆メディテーションセンターという名前と

は裏腹に三十分と意外と短い時間である。

話によると、四月に集中的にそれを行はらしい。彼らの行うメディテーションとは、不淨觀並びに無常觀といわれるものである。

パリー教典の中に、鼻からは鼻汁が流れ、耳からは耳汁、口からは痰が吐きだされ肛門からは汚物が排出される。比丘はこの身が不淨であると観じつつ専ら修行に務めよ、さらに我々の命が終つた後、その体には蛆虫がわき鳥や獸によつて蝕まれ、そして最後には骨だけがそこに残る、比丘はこの身が無常であると観じつつ専ら修行に務めよといった内容のことが説かれてゐる。

つまりは、この身が不淨であり無常であると観することによって自分自身に対する執着を断ち切れということだろう。

自分に対する執着がなくなれば、パリー經典の中に説かれている釈尊のいう苦の原因が全て

消え去ってしまう。

私の住んでいたパクナム寺のバングラデイシユ僧侶の部屋には必ず人の死体の写真が貼られていた。それも半分腐りかかつて腹の中の臓器がまる見る見えの写真である。

彼らは、その写真の死体を頭の中にイメージしながら不淨觀、無常觀といったメディテーションを実践している。

これらのメディテーションをこのセンターでは在家信徒の人達と一緒に行つており、又、メディテーション終了後の勤行にもやはり信徒達は参加し一緒に経を唱えている。

尚、お経は全てパリー語で唱えられている。

以上、バングラデイシユ比丘トレーニング＆メディテーションセンターの生活を通して、彼等の国での南方上座部仏教を簡単にではあるがみてみた。（私が見、そして聞いた範囲内で。）

その形態は少なくとも私が一年間僧侶生活を送ったタイ国のそれと若干の違いはあるにせよあまり変わらないようである。

ただ一つ気になつたのはサングラス派の寺院では戒律を厳しく守りメディテーション等を行い更に沙弥の教育にも力を入れているのに対して、マハテロ派の寺院ではその傾向が弱いという点であつた。ちなみに、ここで取り上げたバンガラデイシユ比丘トレーニング＆メディテーションセンターはサングラス派に属している。

#### 子供達に教育を

今、バングラデイシユの僧侶達が熱心に行っている活動として、学校教育の運営が挙げられる。

バンガラデイシユにおいては、現在、義務教育の制度がなく、教育を受けたい者だけが学校に通うというシステムをとつてゐる。

私の聞いた話では、全人口の七十パーセントの人間は学校教育を受けていないという。貧しさの為子供を学校に通わせるよりは、働かせてお金を稼せがせた方がいいという考え方の親が多いようだ。その為、少なくとも仏教徒の子供達にだけはちゃんとした教育をということで、僧侶達は学校教育の運営に力を入れている。

又、もう一つの理由として、仏教徒の子供達が他の学校いわゆるイスラム教（これは政府の運営である）やキリスト教等の学校に通えば、そこを卒業する時期には彼らの宗教を信仰するようになってしまらし。そうなると、たゞでさえ数の少ない仏教徒が増え減つていってしまう。僧侶達にとつては、どうしても仏教徒の学校をつくる必要があったのである。——この国では異常な程宗教色が強いということを頭に入れておいてもらいたい。例えば、キリスト教の病院ではキリスト教徒しか働くことができ



仏教徒によって建設中の学校

ず、そこで他の宗教を信仰している者が働くこうとすれば、キリスト教に改宗しなければならない等など、これもイスラム共同体のその團結力の強さに対して他の宗教もそういう性質を持たざるを得なかつたのだろう。——しかし、その数はバングラデイシユの国の中に十五軒程しかなく、そこに通う子供達の数も全ての学校を入れてわずか二千三百人余りというから、五十万人の仏教徒の内四分の一の約十二万人が教育の必要な子供達としても仏教徒の学校が彼らを受け入れることのできる人数はわずか一パーセントにも満たない数である。

今回こゝでは、チッタゴンにある AGRA SARA Bouddha Anathalaya Temple<sup>o</sup> 以下アグラサラ寺）での学校教育の状態を紹介したいと思う。

尚、この寺院はマハテロ派の総本山である。前回、マハテロ派の僧侶は戒律堅固の性格が

弱いと指摘したが、この派ではそれよりも社会福祉的な活動に力を入れている。

先ず、寺内には女子寮、男子寮、学校といったものが建てられており、現在男子生徒二百人、女子生徒五百人がこの寮に住み学校へと通っている。この数字を見てもわかるように、この寺院では女子を優先的に受け入れている。(ダッカ市内には全寮制の生徒数男子五百人という学校もある。)

殆んどの生徒は仏教徒の子供達である。

やはり、経済的に子供を学校に通わせる余裕のない家庭、又は両親とも亡くなつて孤児となつた子供を預かり学校教育を行つてゐる。そこには三十人の先生が雇われ生徒達に教育を施している。

日本でいう小学校教育が五年間、中学・高校教育が五年間、そして希望によつてはチッタゴン市内にあるチッタゴン大学などにも進むこと

ができる。又、この寺内には、女子生徒だけを対象にした四年制の短期大学的な性質の学校がある。毎年、何人かの女子生徒は中学、高校教育が終るとこの学校へと進んでいる。

これらの学校、寮の維持費、生徒達の生活費、先生に支払われる給料等は、全てアメリカ、ノルウェーなど海外からの援助金で賄われている。ちなみに、我国からは全日本仏教連合、立正佼成会から援助がなされている。

寮も学校も、海外からの援助金で建てられたものである。土地だけは寺の所有であるらしい。

バングラデイシユ政府からはわずかに七十人分

の子供達の分しか援助がなされておらず、現在も各国からの援助は続けられている。つまり、寺院 자체ではこれらの活動をする機能は一切もちあわせておらず、あくまでも他国からの援助金があつて初めて学校等の運営がなされるという状態である。

これは、キリスト教などの学校の場合にも同じことがいえる。彼等の場合は、その運営資金は殆んど同じキリスト教国から送られている。

これも、国全体が貧しい為、自分達の力だけでは思うように活動できず、どうしても他国からの援助を受けざるを得ないらしい。

私がこのアグラサラ寺を訪れた時、ちょうど学校は試験が終わって長期の休みに入つており、生徒の大半は親元へと帰つていたがそれでも百人ぐらいの子供達は残つていた。

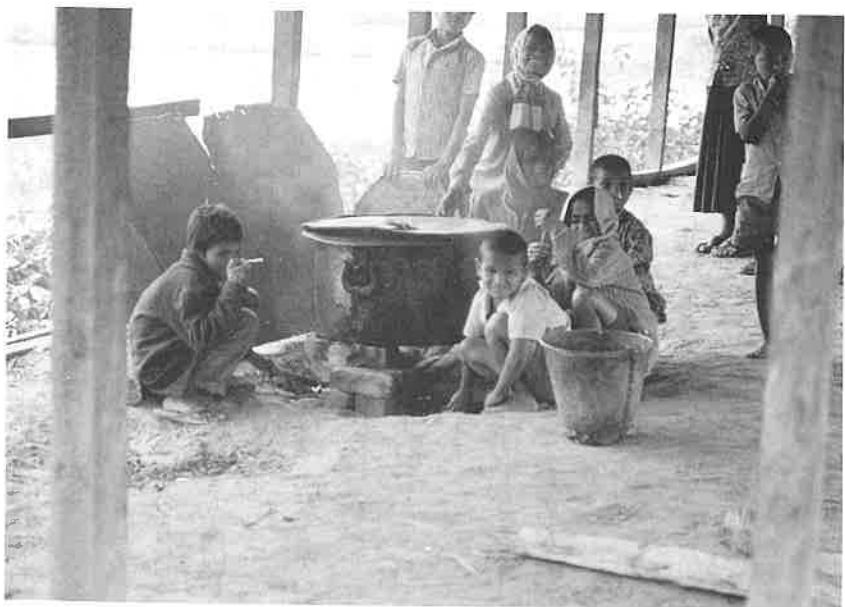
この子供達に「なんで家へ帰らないのか」と聞いてみると、「家に帰るよりはここに居た方がいい」という答えが返ってきた。

この子供達にとつては、家よりもここで的生活の方が快適らしい。少なくとも、ここに居れば三度の食事を食べられ、ベットに寝られることは確かである。

しかし、その食事も御飯と少しばかりのおか



生徒の様子



ず（私が彼等の部屋へ入つていった時には御飯におかず代わりとしてピーナツを食べていた）

と十分なものとはいえず、又、十二月の寒い気候の中、子供達はシャツ一枚に半ズボン、そして跣という姿で寒さに震えていた。学校や寮の施設等は、一応の完備がされているが子供達の生活面に関してはまだ十分な配慮がなされていないようである。

夕方、寺内にある池の辺をアグラサラ寺の総務総長、スガタナンダ比丘と二人で散歩してい

ると、パリー語で唱えられたお経の声が聞こえてきた。彼は、女子寮に住む女の子達が唱えていると教えてくれた。やさしい響きのお経だ。

スガタナンダ比丘は、お経の声が聞こえてくる方をじっと見据えながらポツリとこんな言葉を呟いた。

「私達もこうして仏教を広めようと必死に努力しているんです」と。

この一言に、バングラデイシユ仏教の現在の状況が全て現されているように感じられた。

この国では、仏教が我々日本やタイ、スリランカ、ビルマ等の国々のように、ある程度の位置、又は国教的存在にあるのではない。あくまでも、イスラム教に対する異教徒の教えなのである。そこでは、僧侶達の努力なしにはその教えが衰退していくことは火を見るより明らかであろう。

### バングラデイシユ仏教の問題点

バングラデイシユ仏教界の抱えている問題点を、私が第三者的立場で見た範囲内で次に挙げてみたいと思う。

1 バングラデイシユの国自体が、イスラム教的国家を目指している為、何らかの形で異教徒と呼ばれる仏教徒は、その行動に規制を受けている。

2 仏教徒の数が少なく、又、沙弥達を育成する十分な機関がない。

3 寺院で活発な学校教育、孤児等の社会福祉的活動を行いたくとも、その運営資金が思うようにならない。

4 現在、バングラデイシユ仏教界はサングラス派、マハテロ派の二派に分かれている

が、両派とも互いに嫌悪し合い交流がなされていない。

1に關しては、政府の上層部がすべてイスラム教徒という上に（他宗教を信仰している者は絶対に国のトップの地位には就くことができないという）彼等から国民に至るまでその團結力が強いというこの国の中では、他宗教を信仰している者は日本流にいえば肩身の狭い思いをしている。

しかし、少なくとも信仰の自由は認められ、

日常生活的レベルではそれはあまり表面上には

現われていないようであるから、現在の所他宗教の人達はその範囲内で活動するしかないであろう。この国の上層部の人間がもつと寛容にイスラム教以外の宗教を受け入れる方針を取る以外にこの問題が解決される術はないと思われる。

2については、これから先の見通しは明るい。沙弥達を育成する十分な機関がないというのは南方上座部の教義をしつかりと教えることのできる僧侶がないということである。

しかし、現在私の知っている限りでも数十名の沙弥達がタイ国にパリー語、戒律等の強学に来ており、二十年、三十年後には彼等がバングラデイシユに帰りしつかりとその法を伝えることになるであろう。

又、仏教徒の数も年々わずからではあるが増えてきている。

僧侶が行っている学校教育、孤児院の運営に

関しては、その機能は完全とはいえない。彼等にしてみれば、大勢の子供達を預り（仏教徒の子供を中心に）十分な学校教育を施したいのであるが、アグラサラ寺での運営資金がすべて海外からの援助で賄われているという状態をみてもわかるように、その運営資金が思うようにならないのである。

尚、これらの援助が行われているのは、マハテロ派寺院に関してだけであつて、サングラス派では子供達の生活費等はすべて寺院で負担している。その為、生徒の数も二十人乃至三十人と少ない数である。

日本やタイ国であるならば、僧侶は信徒の方々の喜捨を元に寺院活動並びに社会福祉的活動を行うことができるのであろうが、バンガラディシユにおいては国全体が貧しく、国民の生活レベルが低い為、信徒の人達は寺院に御参りこそすれ、とても喜捨ができる程の余裕はない。

自分達の生活を維持していくだけで精一杯なのである。

従つて、僧侶が活発な学校教育等の運営を行いたくともその運営資金が思うようにならないというのも頷ける所がある。

少なくとも、この国が豊かになり、国民の生活レベルが高くなるまでは、これからは両派共に（なぜマハテロ派だけに海外からの援助がなされているかは次で述べる）海外からの援助が必要であろう。そして、より多くの子供達に教育を施す必要性が感じられる。

彼らの学校を卒業した子供達の中からバンガラディシユの国の未来を考え、この國の發展に貢献できる人間がでてくることをただ願うばかりである。

サングラス派、マハテロ派とバンガラディシユ仏教界が二派に分裂し、その交流がなされていないという原因は、これらの派が二派に分か

れたことに、所以している。

そして現在は、サングラス派にいわせれば「マハテロ派では戒律をしつかり守っていない」といい、マハテロ派では「サングラス派の僧侶は食つて寝るだけ」と所謂、戒律だけを重視し自分達の派のような社会福祉的活動をあまり行つていない（小規模ではあるがサングラス派でも学校教育、孤児院等を運営している）と言い合つてゐる状態である。

海外からの援助は、マハテロ派寺院に限られているというのも、これらの援助機関を悪く言えばこの派が独占しているからである。当然これららの内情を外国人は知らない。

この問題は、第三者的立場から見れば、早急に解決すべき問題である。というのも、異常な程宗教色が濃く、さらに輪をかけてイスラム共同体の団結力が強いこの国の中で、数の少ない仏教徒がその内部で分裂していたのでは話しに

ならない。

どちらも、釈尊の法を受け継ぐ者同士という高い視野から理解し合わなければ、正しく自滅してしまう可能性がある。

これらが、私が見た範囲内ではバングラディシュ仏教界が抱えている問題のように思われた。

今日、明日には解決できない問題もあるが、少なくとも先ず解決できそうな点から徐々にそれがなされるべきであり、またその為には少なからず海外からの援助、協力、そして助言が必要であろう。

これは、同じ仏教徒として我々に与えられた課題でもあるように思う。